

『トンビ』

高台へ上るや、オホーツクの威洋が広がっていた。真冬特有の透度全開の太陽が、海岸線を薄青に染める。数キロ離れた沖には純白の流水ベルト。ツートンカラーの海掌は神々しくもあり、不器量でもあり。

誰もいない展望台、独り佇む俺を薄墨の影が出迎える。一羽のトンビが頭上を回る。おいおい、こちら餌じゃないぜ……。辟易顔も何のその、奴は翼をくねらせる。

「どうしたんだ、何でこんな場所にいる？お前さん、もつと高い所が好きなはずだろ」
怪訝な疑問をやり過ぎ、双眼鏡で氷帯を凝視する。おお凄、でかい鳥が沢山いる。まだらに砕けた氷の欠片に鷺の群れが集まっている。威光を放つ黒翼の舞い、オオワシだ。野生溢れる褐色の舞い、オジロもいる。チマチマ動く見慣れた風体、おっとカラスもいるじゃないか。

ふと視線を外した。数秒の間の後に再び空を睨んだ。トンビよ、何で向こうに行かない。砕けた氷塊に乗れば魚も沢山いるじゃないか。こんな冬枯れの場所にいたって餌なんかありやしない。俺は食い物なんて持ってない、匂いで分かるはずだろ。

諄い詮索に辟易したか、奴は斜めに滑空すると後ろの枯れ木に着地した。禿げた細枝がパサリと揺れた。

「お前、怖いんか。鷺が怖いんか。序列があるのか。お前の居場所は此処にはないのか。でもカラスはあっちにいるじゃないか。あれだけ体格差があっても、沖で勝負してるじゃないか。お前、どうしたん。お前も立派な猛禽だろ。どうして逃げるん、どうして逃げるん」

息巻く顔にシベリア育ちの烈風が吹き付ける。肩の付け根に電流が走る、治まっていた痺れが右半身を駆け抜けていく。思わず天を仰いだ。ハツとした。

「こいつにだって事情があるんだ。沖に出たくても叶わない、何かの事情が」
古傷の洗札に強張っていた眉間が弛んでいく。

きつとこれが今の奴のベストなんだ。妥協してそれでもこの地を諦めたくなくて。流氷まで行けなくても、ここが奴の精一杯の立ち位置なんだ。

すつと息を吐くと味わった事のない気怠さが込み上げた。数年分の膿を丹田で感じるような。振り払うように腰を伸ばした。

「あんた、思い込み強すぎだよ」
枯れ木に佇む奴の目が呆れたように笑っていた。

「さあ、この旅も終わり。東京へ戻って明日からまたデスクワークだ」

惜別の落陽がガクガクの膝を照らした。琥珀に染まった足元で奴の影が静かに揺れた。